資料４

ヒアリング調査によるキーワード抽出

■観光交流分野（観光、交流、地域活性化等）

①地域や社会への問題意識・課題	
	○少子高齢化、若者の都市部への流出（山間部では過疎化が進展し、空き家が増加） ○中播磨地域においても都市部と山間部との格差が拡大 ○若者の地域への期待感の低さ（チャレンジする人を応援する環境や、失敗しても許される風土がないため、若者は都市部へ出て行き、戻ってこない） ○中学生、高校生、大学生が地域と関わる機会が少ない ○各世代が感じている将来像を話し合える機会が必要（年長者は偉ぶらず、若者の言葉に耳を傾けることが大事） ○若い世代が居住する地域のしきたりや風習にがんじがらめにされ、新しい提案をしても改革できない状況 ○自治会等地縁団体のアップデートの必要性（自治会等と並立する自発性に基づくサブシステムの構築） ○会社勤めだけでない自分にしかできない仕事づくりの重要性 ○地域づくり団体の活動停滞（構成メンバーにサラリーマンが増え、活動のタイミングが合わない） ○観光による地域活性化が困難な地域（目立った観光地・特産品・観光施設のない地域（農村）、都市部と山間部に挟まれ通過地となっている地域） ○移住における迎え入れる側と受け入れてもらう側の意識、温度差（「お客様」から「同じ場所で暮らす一員」への関係性の進展が必要）
②課題等に関する環境変化や未来に繋がるポジティブな動き、トピックス等	
	○新型コロナウイルス感染拡大による都会集中型から地方分散型への変化の兆し ○地域資源活用の活性化（オーガニック野菜など地域の特産品づくりの活発化、山城を利用した地域の活性化等） ○自分が住んだり働いたりするエリアの価値向上に対する関心の増加 ○移住者による起業に触発され、地元住民による開業が増加（できなくて当たり前→やってみよう！への意識の変化）
③目指す地域や社会の将来像	
	○人口減少に対応したスマートまちづくり（50～80 歳代の地域のコア世代が、いまだに高度経済成長・人口増大の地域モデルから抜け出せないでいる） ○お金に換算できない、人のつながりや交換経済など社会的包摂度の高いスローな地域づくり ○若者たちが地域に期待を持ち、いろいろな分野にチャレンジする社会（新しいことに取り組む若者を大人が応援する環境づくり） ○文化財の観光資源化（寺社めぐり、山城めぐり、伝承をビジュアル化して商品化等） ○観光農園の開発（農業の担い手不足への対応） ○地元住民と移住者が無理に立ち位置を変えずに手を繋いでいける社会
④テクノロジーの進歩等を踏まえた地域や社会の将来像	
	○ネット社会やテクノロジーの進歩により、地方でも若者が定着して生活できる環境を実現（テクノロジーの進歩は多自然地域での活動に追い風）

■産業分野（商工業、農林水産業、多様な働き方の推進等）

①地域や社会への問題意識・課題	
	○地元中小企業の人材確保の難しさ（少子高齢化、都市部との採用競争） ○大型店・フランチャイズの進出やネット販売への移行により、多くの地元中小商業者が衰退 ○製造業などいまだに需要拡大路線で自転車操業を続け、自然の循環を破壊するパターンから抜け出せていない。 ○若い世代が住み続けたい、帰ってきたいと思えるためには「仕事を魅力的に見せること」と「魅力的な仕事を創ること」の双方が必要 ○若年層の人口減少と大手企業偏重により、若手の農業後継者・担い手の確保が困難（特に男性の確保が困難）
②課題等に関する環境変化や未来に繋がるポジティブな動き、トピックス等	
	○地元での「小商い」(「儲ける」ことよりも、自分のやりたいこと･責任のとれること･楽しみながらやれることを、自分の手の届く距離で行う働き方）による仕事づくりの萌芽 ○企業イメージの刷新が採用活動のプラスになることが数字となって現れてきている（例：ホームページのリニューアルにより若い世代から就職問い合わせが急増） ○企業において自発的にブランディングを考え、行動する機運の芽生え（社員が自社の未来を「自分ゴト化」して考えるきっかけ） ○東京や大阪などの都市部で勤務する兵庫出身者の故郷への関心の高まり（リモートワークが一定の浸透をし、「必ずしも都市部に住む必要がない」という国民意識が形成されたことは、地方企業や地方のフリーランスにとって追い風） ○人手不足解消に向けた農業の IT 化
③目指す地域や社会の将来像	
	○職住近接のまち(コロナ禍により地方で働く価値が見直されていることは追い風) ○職人仕事など、AI にできない付加価値の高いものづくり ○地方企業の価値が見直され、多様な人のつながりにより豊かな仕事を自発的に生み出す土壌が形成（「魅力的な仕事がない」という思考停止からの脱却） ○子育て中・介護中の女性が働き、安定した収入が得られる地域づくり（女性がその能力と技術を発揮できる場所づくり） ○田畑の流動化の進展による農業に参入しやすい体制づくりと、輸入に頼らない国策としての農業振興
④テクノロジーの進歩等を踏まえた地域や社会の将来像	
	○場所を選ばない働き方の実践（兵庫出身者のキャリアの選択肢が広がる） ○農業の IT 化（スマート農業） ①作業の自動化（ロボットトラクタ、スマホで操作する水田の水管理システム等の活用等） ②情報共有の簡易化（作業の記録をデジタル化・自動化することで、熟練者でなくても生産活動の主体になることが可能） ③データの活用（ドローン、衛星によるセンシングデータや気象データの AI 解析により、農作物の生育や病虫害を予測し、高度な農業経営を実現）

■暮らし分野（子育て、教育、健康福祉、環境、防災等）

①地域や社会への問題意識・課題
○子育ての負担が母親に集中 ○本物に触れる機会の少なさ（バーチャルではなく実際に観る・体験する機会が幼小期には必要） ○教育機会の学校間格差、地域格差（受けられる教育の質や学校の評判に格差） ○学歴偏重の「世間の目」（親世代がいまだに学歴信仰と大企業への就職が子どもの幸福につながると盲信。学歴で格付けされる社会） ○孤独感の広がり（一人暮らしの増加、核家族化による子育て負担等） ○高齢者の暮らしにくさ（商店の減少やキャッシュレス化進展による買い物の不便さ、免許返納による交通の不便さ） ○移動販売の将来性に不安（買い物困難地域だけでは経営が成り立たない） ○認知症カフェは補助金が終わると衰退（ボランティア任せでは限界がある） ○高齢者が元気に集える場所がない。 ○地域福祉活動の原動力であるボランティアの担い手不足（地域福祉活動への無関心、若年層の互助精神の欠如、IT 情報化による人のつながりの希薄化） ○里山管理の放置による環境劣化、獣害問題（人口減少により放置された里山が増え、シカ・イノシシ等の獣害が増加） ○子どもたちが自由に自然環境に触れることができる場の維持（里山に代表される自然が、獣害問題等により危険なものと思われる風潮の改善） ○地域における防災意識の低さ（地区防災計画の策定、高齢者・障害者等の避難支援体制づくり等が進んでいない）
②課題等に関する環境変化や未来に繋がるポジティブな動き、トピックス等
○「新しい学び（探究的な学習活動）」の広がり（社会からの関心の高まり） ○学校ごとの特色づくりの進展（高校生の学びへの関心の高まり） ○高校では学校の枠を超えたつながりが拡大（生徒会同士の交流等） ○子ども食堂の増加（子どもや子どもを持つ世帯のサードプレイスの役割） ○高齢者だけでなく若い主婦層も移動販売の顧客になる可能性（コロナ禍で実証） ○ご近所ボランティア（買い物、ゴミ出し等の困りごとを近所で有償等により助け合うシステム）に取り組む地域の増加 ○子どもたちが自然体験できる遊び場として里山を活用（里山ガーデン等）
③目指す地域や社会の将来像
○子ども一人一人の個性が尊重される社会（教師だけでなく多様な考えや個性を持った人との出会いが大切） ○時代にあった地域活動、若者が住みやすい環境や新しい起業ができるような体制づくり ○芸術文化など生活を楽しく豊かにするソフトの充実（姫路城周辺をはじめ市内に点在するミュージアムの魅力向上と相互連携により、まちの文化度を向上） ○循環型のエリアマネジメント（自分や家族にとって本当に必要なモノは何かを認識し、それをできるだけエリア内で自給） ○水や空気の美味しい、子どもや高齢者に優しい地域（適切な自然環境、工場配置、商業配置、住宅配置、交通網などの見直しが必要） ○女性の意見が反映されるまちづくり（女性目線での災害時の計画など）

	○地域住民が安心して暮らせる社会(お互いが声をかけ合い共助の精神を忘れずぬくもりのある地域像) ○共助による地域防災力の強化（ご近所とのつながりの見直しが必要） ○おしゃれとおもてなしをいつまでも受けられる豊かな地域づくり(心と体のケアを受けられる場所づくり) ○自然と共生するひとづくりとまちづくり（自然と共生する生活を次世代に継承） ○飽和社会における余白の大切さ（物も情報も自分のキャパ以上に抱え込むことが当たり前になっている日常には、広がりと深みのある心休まる時間が必要）
④テクノロジーの進歩等を踏まえた地域や社会の将来像	
	○オンライン診療の整備による地方における医療不安の緩和(テレビ電話で医者またはAIが怪我や病気を診断、ドローンによる薬の配達) ○自動運転の進化により、高齢者が自由に移動できる社会（通院・買い物時に自動運転による低料金タクシーを利用） ○5G を利用した社会インフラや AI 技術を駆使した働き方等による安全安心な生活スタイルの実現(危険作業等へのロボット活用による人への負担軽減) ○災害時の声掛けや認知症高齢者の夜間見守り等への革新技術の活用 ○人と人が触れ合うことをベースとしたまちづくりも大切(人との触れ合いの中で感じられる「わざわざ」(「わざわざ」足を運ぶ、「わざわざ」会いに行く）とテクノロジーの進歩の共存が望ましい)

《ヒアリング調査概要》

新地域ビジョンの検討に向け、地域課題等の抽出を行うため、中播磨地域で先進的な活動をしている事業者・地域団体、地域のキーパーソン等を対象にヒアリングを実施

〇実施時期：令和２年６月～7月

〇実施方法：書面アンケート方式

(新型コロナウイルス感染拡大防止のため対面ヒアリングは実施せず)